

今大会を顧みて

日本教職員バドミントン連盟

副会長 稲石一雄

今年度、長野県で開催していただき誠にありがとうございます。長野県では毎年「志賀高原バドミントンカーニバル」として、県内・県外の有力高校が集まる大会が開催されています。ところが期日が本大会と同じ日程なのです。昨年度、生徒を引率した際にこのことに気づき、担当の先生に調整をお願いした経緯があります。それだけに今回の参加数が気になっていました。幸い多くの参加を得て安堵いたしました。

メイン会場はオリンピックで使用したホワイトリングです。観客席の四隅にはオリンピックのモニュメントがあります。ここで記念撮影をする選手もいました。入賞者の写真も背景に写るように撮影しました。JEFのホームページに掲載していますのでご覧ください



《メダルをかじってる！》

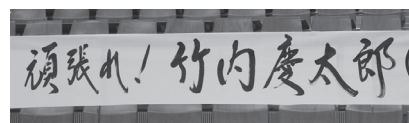


《会場入り口の万国旗》



《ホワイトリング外観》

さて競技ですが、今年も手に汗握る激しい戦いがありました。団体戦は一般男子の愛知県、一般女子の茨城県ともに第2シングルスまでもつれ込む接戦を制し初優勝を勝ち取りました。一般男子単では地元の竹内選手が2位になり会場が沸きました。一般男子複では昨年優勝の堂下選手がパートナーを変えて挑戦しましたが惜しくも決勝で敗れ、東京の竹内・駒田組が初優勝をしました。一般女子複も石川の南出・長谷川組が初優勝です。二日目は終了時間がずいぶん遅くなりましたが、多くの審判補助の高校生が最後まで熱心に観戦していました。彼らは手に汗握り、固唾をのんでラリーを見守っていました。そして、ラリーが決すると思わず拍手をしたり、笑顔がこぼれたりしました。高校生にとって先生方の素晴らしいプレーを見ることは大変参考になり、良い刺激が与えられます。先生方の真剣な姿が生徒に感銘を与え、生徒がバドミントンをますます好きになり、将来にわたって続けるようになればこれは本連盟の趣旨に適うことです。選手のみなさんは自分の成績だけでなく、生徒に大きな影響を与えるということを意識して大会に臨んでもらいたいものです。例えば線審のジャッジについて、直接線審を責めるような言動は厳に慎むべきです。それによって生徒が自信を無くしたり、バドミントンが嫌いになってしまうことだってあります。また審判に文句を言って良いのだと勘違いすることもあります。このようなことは大きな損失です。



年齢別ではかつて若い頃に活躍した人が復活して来たり、年代を変えて上位を狙ったりと毎年いくつかのドラマがありますが、今年の白眉は50年連続出場の杉田選手です。第2回大会に初出場・一般単優勝以来、数多くの優秀な成績を残してきました。代表者会議、総会、開会式にも必ず出席しています。その姿勢には教職員大会参加者として見習うべきものがあります。今回は単複とも準優勝でしたが、どちらもファイナルの熱戦でした。最終日は他の種目が終わり、70MSが今大会最後の試合として多くの参加者、関係者が見守る中で行われました。若い高校生にも多くの示唆を与えたことでしょう。

最後になりましたが、開催にご尽力いただいた多くの関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。